

## 書 評

## 『論文投稿のインフォマティクス』

山崎茂明／著

東京 中外医学社

2003年4月1日発行

A5版 167p 定価 2,600円



PubMed (MEDLINE) によると世界の科学論文のうち、過去5年間の統計では日本はアメリカに次ぎ第2位の生産国だそうです。以下、イギリス、ドイツ、フランス、…と続き、論文の質を問う被引用シェアでもアメリカ、イギリスに次いで第3位につけています。実際、各専門分野の海外学術誌では、基礎医学はもとより臨床医学においても日本人の論文はかなりの掲載比率を占めています。ただし、臨床分野もおしなべて活発ですが、何故か精神医学と小児科学だけは低調でした。また、臨床医学の「5大誌」、N Engl J Med、Lancet、JAMA、BMJ、それに Ann Intern Med はいわゆるコアジャーナルと呼ばれ、医学界の国際的なオピニオンリーダーとして君臨しています。しかし、それらの総合医学誌では日本からの論文は極めて稀です。

このように、本書は生命科学の各分野ごとに「一流誌」6誌を選定し、その著者分布を通じて世界的にみた日本の学術情報の動向を鳥瞰しています。その目的は「日本の生命科学・医学領域における、国際論文発表の活性化に寄与する」ことにあり、特に先の5大誌と Nature、Science、Cell などの超一流誌については、編集のポリシーや投稿の心得が具体的に示されています。また、右の「米英勢」に限らず、ロシアや中国の台頭など、学術論文も国際的な政治経済情勢と無縁ではないようです。それ故か、図書館員の私にとっても興味深々に、自館のコレクションを思い浮かべながら一気に通読しました。

ところで、図書館員が海外学術誌の各特徴を見極め、自信を持って評価することは至難の技です。例えば、購読誌の選定に際して各科の要望につれ流されてしまうのは、私だけではないでしょう。ところが、本書によれば図書館員も学術誌の評価に当たって、「一家言」持つことが可能になります。その根拠は何か。

まず、最近の情報学 (Informatics) が採用する文献計量学 (Bibliometrics) やインパクトファクター分析による数値化によって、主観や曖昧性を排除することにあります。もちろん、インパクトファクターについては一章を割き、その効用と限界が詳しく解説されています。さらに「国際ルールへの理解」では、二つの重要事項が簡潔に紹介されています。それは、「発表スタイルの統一」から「発表倫理の普及」へと役割が拡大した Uniform Requirements (生物医学雑誌への統一投稿規程) と、EBM の実践に深く関わり、研究デザインの明確化を図る CONSORT 声明に進んだ構造化抄録です。これらは、日本では医学者にまだ十分認識されてはいないようです。

著者の他の書と同じく、挿絵も入り楽しい読物になっているのは、著者の人柄と元図書館員だったことによる「サービス精神」の表れでしょうか。見習いたいものです

(文責：小田中 徹也/国立京都病院)